自由選択の感覚と肯定的評価バイアスがWell-beingの日米差に及ぼす影響

○中里 直樹

(大分大学福祉健康科学部)

キーワード: Well-being, 自由選択の感覚, 肯定的評価バイアス

Why are the levels of well-being of Japanese and American people different? Effects of sense of freedom and positive evaluation bias

Naoki NAKAZATO

(Faculty of Welfare and Health Sciences, Oita Univ.)

Key Words: Well-being, Sense of Freedom, Positive Evaluation Bias

目的

先行研究 (e.g., Deaton, 2008) では一貫して, 西洋諸国と比べて東洋の国の人々のWell-beingは低いことが報告されてきた。近年, その原因の一つが自由選択の感覚の低さにあることが示されている (e.g., Inglehart et al., 2008; 中里, 2017)。その一方で, 肯定的評価バイアス (以降, PEB) の文化による差異の影響も報告されている (e.g., Kim et al., 2015)。PEBとは, 好ましい特徴が自身や重要他者に該当すると思えやすい傾向のことを指す。先行研究 (e.g., Kim et al., 2012) では, Big Fiveパーソナリティの各特性を好ましいものと捉え, 各特性に影響を及ぼすHalo因子を抽出し, PEBの反映として用いて検討を行っている。

そこで本研究では, PEBによる影響を考慮してもなお, 東洋と西洋 (日米) の人々のWell-beingの高低を自由選択の感覚の差異が説明するかについて検討を行う。なお, 自由選択の感覚も日米両国の人々にとって好ましい特徴である可能性がある (Nakazato et al., 2017参照)。それゆえ, パーソナリティ特性のみならず自由選択の感覚も用いてPEB因子の抽出を行う。

方法

〈調査方法と対象者〉 調査会社マクロミルに委託し, ウェブ調査によって日米の社会人, 各520名からデータを収集した (日米ともに女性: 260名; 日本: $M_{age} = 44.81$, $SD_{age} = 13.49$; 米国: $M_{age} = 44.54$, $SD_{age} = 13.75$)。

〈質問項目〉 Well-beingの測定には人生満足度尺度 (Diener et al., 1985) を, 自由選択の感覚の測定には中里他 (2014) の尺度を用いた。Big Fiveパーソナリティ特性の測定には, Goldberg (1999) の尺度の20項目短縮版 (Donnellan et al., 2006) を用いた。日本語版には, IPIP (<http://ipip.ori.org/>) の内容を基に, バックトランスレーション (翻訳コレイタス利用) によって項目をより理解しやすくしたものを使用した。

結果

分析は全てMplus 7で行った。第一に, 日米それぞれのデータで各尺度の項目に対して確認的因子分析を行い, 因子負荷の絶対値が低いもの (.30未満) 及び明らかな日米差が認められたもの (.30を超えるもの) を除外する措置を採った。結果として, Big Five特性の情緒安定性, 開放性, 調和性から各2項目, 勤勉性から1項目を除外した。以上の結果を踏まえた上で各尺度の項目平均値を用いて以降の分析を実施した。

第二に, PEB因子を設定し, Big Fiveの各特性並びに自由選択の感覚への因子負荷に等値制約を施した (修正指標に基づき, 勤勉性への因子負荷のみ自由推定)。なお, 因子負荷の低さ (.20) 及び適合度の観点から外向性は分析から除外した。この測定モデルの適合度は許容範囲内であった ($\chi^2(8) = 63.03$, $p < .001$; CFI = .94; RMSEA = .08; SRMR = .07)。

最後に, 自由選択の感覚からPEB因子では説明できない成分 (残差分散) を抽出し, その成分がWell-beingの日米差に寄与しているかについて共分散構造分析で検討した。PEB因子から人生満足度へのパスも統制した上で, この残差分散が人生満足度への国変数からの影響を媒介すれば, 自由選択の感覚はPEBの影響によらずWell-beingの日米差を説明することが示唆される。

分析の結果, PEB因子には中程度の日米差 ($d = -.47$, 99% CI $[-.67, -.26]$) が認められたが, この因子から人生満足度への影響は認められなかった ($\beta = -.01$, 95% CI $[-.08, .06]$)。その一方で, 自由選択の感覚の残差分散を介した国変数から人生満足度への間接効果は有意であった ($d = -.19$, 99% CI $[-.28, -.10]$)。PEBの影響を統制した自由選択の感覚は, 人生満足度の日米差の26%を説明していた。最終的なモデルの適合度は許容範囲内であった ($\chi^2(11) = 89.94$, $p < .001$; CFI = .95; RMSEA = .08; SRMR = .04; Figure 1参照)。なお, モデル適合度及び先行研究の結果 (Kim et al., 2015) から, 情緒安定性の残差分散から人生満足度へのパス及びこの残差分散への国変数からのパスも採用している。

考察

結果から, PEBの影響を統制してもなお, 自由選択の感覚の日米差は両国の人々のWell-beingの高低を説明することが示された。この結果は, 両変数の関係性は日米の人々の肯定的な評価傾向の差異によって説明できるものではないことを示唆している。ただし, 先行研究とは異なり, PEB因子のWell-beingへの影響が認められなかった点については今後さらなる検討が必要である。その理由として, 大学生とは違って社会人は, 肯定的な評価バイアスの影響を受けずに生活環境などの他の要因に基づいて人生満足度の判断を下す可能性が考えられる。その一方で, 本研究で用いたBig Five尺度に関しては, 日米での等質性や心理測定の面で必ずしも望ましい結果が得られなかった。それゆえ, 日米での等質性を満たした, より良い尺度を用いた検討が今後は必要である。

Figure 1. 日米のPEBと自由選択の感覚の差異からWell-beingの高低へのモデル。PEB, ES, O, A, Cは肯定的評価バイアス, 情緒安定性, 開放性, 調和性, 勤勉性を表す。値は99%CIに基づき有意。